

## 《新資料紹介》 回覧雑誌「棕櫚（櫚）」

青木文美

### 一、回覧雑誌「棕櫚（櫚）」とその意義

「芸術として真価ある純麗な童話と童謡を創作する最初の運動を起したい」（童話と童謡を創作する最初の文学的運動）、  
「広告用印刷物」。

鈴木三重吉が日本の少年少女たちに贈った雑誌「赤い鳥」は、大正七（一九一八）年七月に刊行された。「赤い鳥」の  
創刊は、児童雑誌の刊行を意味するだけでなく、以後繰り広げられる児童自由教育運動の幕開けでもあった。「童謡」担  
当として、その一端を担ったのが北原白秋である。

白秋によって募集された「創作童謡」は、「唱歌」とは異なり、子どもが自然に口ずさめる歌を作る場所として大いに  
期待された。創刊号には、「創作童謡童謡募集」（第一巻一号、大正七（一九一八）・七・一、赤い鳥社）として、「これは  
直接購読者以外のお方からも広く募ります。童謡は北原白秋、童話は鈴木三重吉が選抜して、優秀なもの両三篇づつ、を紙  
上で推称（う）します。十回以上推称された方は立派な作家として待遇します」と掲げられ、明日の童謡詩人の発掘に積極的  
に取り組んでいる。しかし、童謡に関していうならば、「十回以上推称（う）された」「作家」の出現は、第三期「赤い鳥」投稿者  
の出現まで待たねばならない。

第三期に頭角を現してくるのが、後に雑誌「乳樹（のちにチチノキ）」（昭和五（一九三〇）年二月二十六日創刊、乳樹社）を旗揚げする与田準一、巽聖歌を初めとする人々である。<sup>(1)</sup> 彼らは互いに連絡を取り合い、切磋琢磨することを惜しまなかった。その結果が、回覧雑誌「棕栢（欄）」の発行に見られる。

回覧雑誌「棕栢（欄）」について、藤田圭雄は「昭和二年には、集まって、回覧雑誌『棕栢』を作った。（略）回覧雑誌などというのは、中学生のやる仕事だ。それを、二十歳を過ぎ、作品の評価も定まりかけたこの連中が始めている」（『日本童謡史Ⅱ』、昭和五十九（一九八四）・七・五、あかね書房）と述べ、昭和三（一九二八）年四月十五日の（赤い鳥童謡会）の発足や昭和五（一九三〇）年から十（一九三五）年にかけて発行された雑誌「乳樹」を生み出した原動力として回覧雑誌「棕栢」を位置づけている。昭和二（一九二七）年といえば、第三期の主な投稿家が、「赤い鳥」誌上においても既に一定の評価を得ている時期である。それにも拘わらず、あくまで投稿者として自己の作風に止まることなく歩み続ける姿勢は、停滞することを嫌った白秋の教えを守った第一の弟子たちならではと思わずにいられない。

回覧雑誌という試みは新しい童謡への意思表示でもある。白秋の傘下でありながらも自己の個性を活かした作品を生み出そうとする投稿家たちの強い意志の現れである。しかしながら、回覧雑誌が発行された昭和二（一九二七）年から三（一九二八）年当時、彼らは独自の道を切り開くべく回覧雑誌を発行しつつも、白秋の独断で行われた（赤い鳥童謡会）へ積極的に参加している。何よりも白秋に認められることが優先されたからである。

回覧雑誌「棕栢（欄）」は、白秋の偉力と自らの能力との狭間で揺れ動く若き童謡詩人たちの心の内を現代に伝えている。今までは「赤い鳥」誌上でのみ語られていた（赤い鳥童謡会）だった。回覧雑誌「棕栢（欄）」により、その発足過程を知るばかりでなく、白秋を取り巻く投稿家たちの希望と苦悩に触れることができる。

しかし、この回覧雑誌に関しては、藤田の弁と回覧雑誌に関わった人々の回想録から、雑誌名を知る以外に何も知る術がなかった。幸運にも、一昨年の夏、与田準一の書斎を調査させていた<sup>(2)</sup> 機会を得ることができた。その際、書斎の壁

面にある書棚の上に、ひっそりと置かれている回覧雑誌「棕栢（欄）」五冊（三号、四号、六号、九号、十号）を発見することができた。ここに回覧雑誌「棕栢（欄）」の内容を明らかにしたい。

## 二、回覧雑誌「棕栢（欄）」の内容

回覧雑誌「棕栢（欄）」は、全部で一号から十号まで発行されたようだ。与田準一の昭和三（一九二八）年の日記には、「六月一日、棕栢編集出来」と記されており、これ以降日記に「棕栢」の文字が見えないことから十号で終了したと考えるのが妥当であろう。表題「シユロ」の表記は、九号以外は「棕栢」、九号は「棕欄」になっている。

現在に至るまで、回覧雑誌「棕栢（欄）」に関わったメンバーは、「岡田泰三、多胡羊歯、佐藤義美、福井研介、藤井樹郎、柳曠、巽聖歌、与田準一」であるとされてきた。<sup>(3)</sup>改めて「棕栢（欄）」を繙くと、メンバーは多胡羊歯、佐藤義美、福井研介、藤井樹郎、巽聖歌、与田準一の六人である。

大きさは、縦二十四センチメートル、横十六、五センチメートル。表紙には厚めの画用紙が使用され、各号に手書きのイラストが施されている。表紙以外は洋紙が使われている。表紙のイラストだけでなく、作品も概ね黒色の万年筆によって手書きで綴られている。与田準一が青色のインクを、藤井樹郎が鉛筆を使用している箇所もある。<sup>(4)</sup>

「棕栢」三号には、一号と二号の雑誌名が「誕生」<sup>(5)</sup>だったこと、三号から佐藤義美（緑人）が「棕栢」同人に参加した<sup>(6)</sup>ことが記されている。この他に、編集作業や次回号の作品募集の締め切り日、回覧の順序なども知ることができる。

互いに遠隔地に住んでいた六人は、各号編集担当者を決めて原稿を郵送し、それを担当者がまとめて雑誌にすると各同人が順番通りに郵送で回していた。わかっている限りを記すと、編集担当者は、三号が与田準一、四号が藤井樹郎、五号が福井研介、六号が巽聖歌、七号が多胡羊歯、八号が佐藤義美。これは「五十音順逆順」による。三号の回覧順は、「藤

井↓佐藤↓多胡↓福井↓巽↓与田」になっており、必ず「五日以内廻送の事」と記されている。

「棕栢」六号は現存するなかでは最も頁数が多く活気に満ちている。「赤い鳥童謡会に就いて」と題された記事で「赤い鳥童謡会」の青写真を佐藤義美が白秋の代弁者として語ると、それに答えるようにメンバーが自分の考えを後ろの余白に書き加え議論し合っている。<sup>(8)</sup> それ以外に、新メンバーとして岡田泰三の加入が議論されているが、結局実現していない。「棕栢(欄)」九、十号の頁数は六号の三分の二以下に減っている。リーダー格である与田準一が白秋を頼って上京する時期と重なることも大きく影響していると考えられる。<sup>(9)</sup>

ここに、今回確認できた全ての目次を掲載する。なお、へへは補記を示す。■や★などは、現物に従った。回覧雑誌「棕栢(欄)」に関する詳細な検証は今後の課題としたい。

最後に調査をする機会を与えてくださった与田準一令息、与田準介・博子ご夫妻のご厚意に感謝いたします。

## 「棕栢」三号(昭和二(一九二七))・九・十六発行、編集者 与田準一 全百六頁

巢 福井研介

童謡

剪り花

母

河つぶち

兵隊

永平寺

佐藤義美

与田準一

巽 聖歌

巽 聖歌

多胡羊歯

葡萄もぎり

行く子は

山

鶯

海女

佐藤義美

福井研介

巽 聖歌

多胡羊歯

紫蘇の畑

おんぶ御散歩

合飲の花

鬼さんごっこ

犬鷲

藤井樹郎

福井研介

巽 聖歌

多胡羊歯

多胡羊歯

感想論

北窓舌話 (二)

藤井樹郎

金の燈台

巽 聖歌

無題語

与田準一

創刊号酷評

多胡羊齒

童心抄

与田準一

雑誌改名披露

与田準一

評言

聖歌・準一

童謡誌瞥見

与田準一

散文

遊びほうけた

巽 聖歌

古いノートから

与田準一

日記抄

与田準一

巢

羊齒・準一・樹郎・研介・聖歌

読書録

羊齒・準一・樹郎・研介・聖歌

作品批評欄

羊齒・準一・樹郎・研介・聖歌

落書欄

全員

后記

与田準一

展望台

与田準一

「棕栢」四号 (昭和二 (一九二七) ・十・日不明発行、編集者 藤井樹郎 全九十四頁)

■ (一)

■ 月夜の梨

与田準一

■ 童謡集

山の日暮、水無月

準一

浴室で、風

聖歌

いさかひのあと

羊齒

月の中、銀ぐさりの芽、花火、草の実、朝の唄

義美

椎の木のかけ、秋の扇

樹郎

■ (二)

■このごろのこども 多胡羊齒

■印象筆語 福井研介

■いわゆる四四四調について 与田準一

■多胡氏と作 巽 聖歌

■多胡羊齒君 福井研介

■多胡羊齒氏の童謡について 与田準一

■最近における多胡氏のもの 藤井樹郎

■巢 準一、樹郎

■後記 樹郎

「棕栢」六号 昭和三（一九二八）・十二・日不明発行、編集者 巽聖歌 全百二十二頁

万葉管見（感想） 藤井樹郎

童謡と詩と（作品）

お月夜・海から来る風・草あやめ・秋晴れ・靄

佐藤義美

詩

粟を刈る・村の子呂・短日・木時計・草・霜月・幼童禮讃

与田準一

外套・麗日臥吟・早春・旅 巽 聖歌

短歌

青天

準一 ・牛蒡の花

聖歌

・春より夏へ

羊齒

童謡

春は

福井研介

草むすび・綱すき爺さん

多胡羊齒

子牛・しづかな夜・もとの学校

与田準一

ざくろの花・寒い冬・

巽 聖歌

本号童謡瞥見

準一・義美・聖歌

昭和貳年度に於ける「赤い鳥」童謡瞥見

赤い鳥飛翔歴

準一

田螺坊舎

★寂しかった

巽 聖歌

虹と爆竹（随稿）

与田準一

田螺石人

巢・批評・通信・展望台

「棕栢」九号 昭和三（一九二八）・三・十八発行か、編集者 与田準一 全六十八頁

童謡

叱られて・こつくり・ぶるる

巽 聖歌

春ふみ・はる・帰り・別れ

藤井樹郎

雪ばれ・妖精の国

多胡羊齒

朝の草場・夏来る朝・お馬の眼

与田準一

柳河俚謡録

与田準一

持ち越した借金

巽 聖歌

短歌

草廬主人（不明）

玩具帳

田螺乃性（与田準一）

批評 同人  
巢 同人

「棕栢」十号（昭和三（一九二八）・六・一発行、編集者 与田準一 全七十九頁）

詩――

冬一章・地に撒くもの

福井研介

迎春・春・夏

与田準一

歌――

二 首

福井研介

謡――

晩 晩

佐藤義美

蜜柑畑・批把山・鞆

巽聖歌

山田・山ざくら

多胡羊齒

風からくる鶴

与田準一

散文――

空・花・点

巽 聖歌

僕の手記

福井研介

蛙 言

緑人（佐藤義美）

赤い鳥童謡会について

批評欄

ふざけてらア。

食堂。



## 注

(1) 『赤い鳥童謡集』(昭和五(一九三〇)・十一)において、北原白秋は「赤い鳥」の童謡欄の投稿家を第一期(大正七(一九一八)・七)大正十二(一九二三)・六)、第二期(大正十一(一九三三)・七)大正十四(一九二五)・六)、第三期(大正十四(一九二五)・七)昭和四(一九二九)・三)と分け、特に、第三期について「生采離々、香氣充溢、鮮麗にして幽雅、精冽にして簡明、童心と寂心との融合、歌謡と詩との淨昇」期と評価している。第三期の代表的な投稿家は、本文にあげた以外に、多胡羊歯、岡田泰三、日下部梅子、武田幸一などがいる。なお、雑誌「乳樹(のちにチチノキ)」は、昭和五(一九三〇)年二月二十六日に与田準一、巽聖歌、有賀連などによって創刊され、昭和十(一九三五)年五月十三日まで発行された。全部で十九冊。後に、新美南吉、柴野民三、清水たみ子が参加している。

(2) 例えば、「藤井樹郎」(畑中圭一、「日本児童文学大事典」、平成五(一九九三)・十・三十一)には、「与田準一、巽聖歌、多胡羊歯らと回覧雑誌「棕栢」を起し」とある。また、「与田準一全集\*空がある\*第一巻童謡集」(昭和四十二(一九六七)・三・十、大日本図書)の「あとがき」には、与田自身が「のちに師の提唱によって誕生した赤い鳥童謡会(ながくは続かなかったのですが)、また巽聖歌と「棕栢」や「チチノキ」同人を結成することとなったいわば投稿仲間の合歓、切磋琢磨のすがたなり意味あいは、いったいなにごとを語っていたのでしょうか。」と振り返っている。しかし、どの回想録もその内容には触れていない。

(3) 『チチノキ』の童謡(藤田圭雄、「日本童謡史Ⅱ」、昭和五十九(一九八四)・七・五、あかね書房)による。

(4) 与田準一が青色のインクを使用している箇所は、「棕栢」四号の余白に書かれた雑記と六号の与田の文章全部である。藤井樹郎が鉛筆を使用しているのは、「棕栢」三号の「読書録」と「落書らん」(目次では「落書欄」)である。

(5) 「誕生」について、本文では、「誕生」改題「棕栢」とある。また、「棕栢」という雑誌名は、「巽君の案で私も大好きです。藤井氏は一位に推してゐるし、羊歯・研介の二君も採つてくれてゐるし、これに決めました。棕栢の如く常に新鮮にはばたく時が来た」ところから名付けられている。

(6) 佐藤義美は、「落書らん」(目次では「落書欄」)で、「私もお入れして頂きました。」と書き残している。また、「后記」で与田準一が「佐藤義美氏の加盟。(略)佐藤氏の加盟はみなさんにはかるとまが無かつた。不服はないと思ふ。よろしく

のこと。」とメンバーに向けて告げている。

(7) 各人の住所は次の通りである。

与田準一——福岡県山門郡瀬高町

巽聖歌——福岡県久留米

藤井樹郎——山梨県北都留郡鳥澤

福井研介——岡山県岡間田町

多胡羊歯——富山県氷見郡

佐藤義美——東京小石川原町

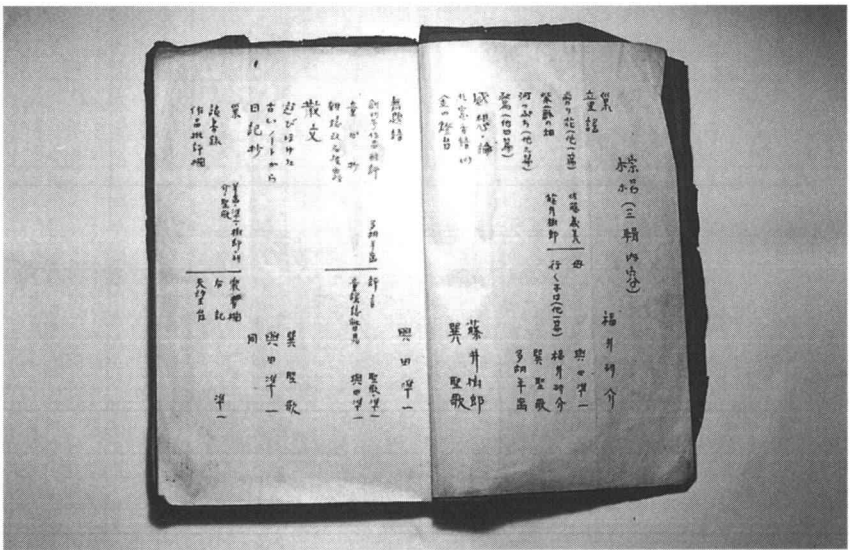
(8) 東京にいた佐藤義美が白秋と回覧雑誌「棕櫚(欄)」のメンバーとをつないでいたようだ。「赤い鳥童謡会に就いて」(「棕櫚」六号、昭和二(一九二七)・十一・日不明)では、「赤い鳥童謡会を起すに就いて(略)先生よりも再三お話もあつた(略)然し僕一人の草案ではと遠慮してゐたが近く与田さんが巽さんが上京なさるので共に万全を期して会の創立をはかる積りである。皆さんの方で計画をおめぐらし下さつて棕櫚の上にも指示下さい。その時の先生のお言葉の大意はかうでした。君らの方でもくろみなたてて来たまへ。そしたら僕が力にならうから。毎月一回の集まりもよからう。ごくうちわだけのうすいパンフレット様のものをだして地方会員との連絡をとるもよからう……」という白秋のことばを伝えている。与田と巽を立てているところからもこれらのメンバーの力関係がうかがえる。この提案に対して、巽聖歌は「通信欄」に書いた「赤い鳥童謡会の件」(「棕櫚」六号、昭和二(一九二七)・十一・日不明)のなかで、「主体を白秋門童謡詩人に置いて貰ひたい。(略)機関誌は棕櫚同人を主とし、他を徒とする。白秋先生はこの機関誌を「日光」「近代風景」の如くなす義務を有する。」と強く訴えている。また、多胡羊歯は、同じ「赤い鳥童謡会の件」(「棕櫚」六号、昭和二(一九二七)・十一・日不明)に「巽さん、与田さんと御相談の上、よい様にして下さい。」と書いている。多胡の姿勢も佐藤の姿勢と共通している。

(9) 与田は、昭和三(一九二八)年三月三十日に白秋を頼つて上京している。

(博士後期課程二年)



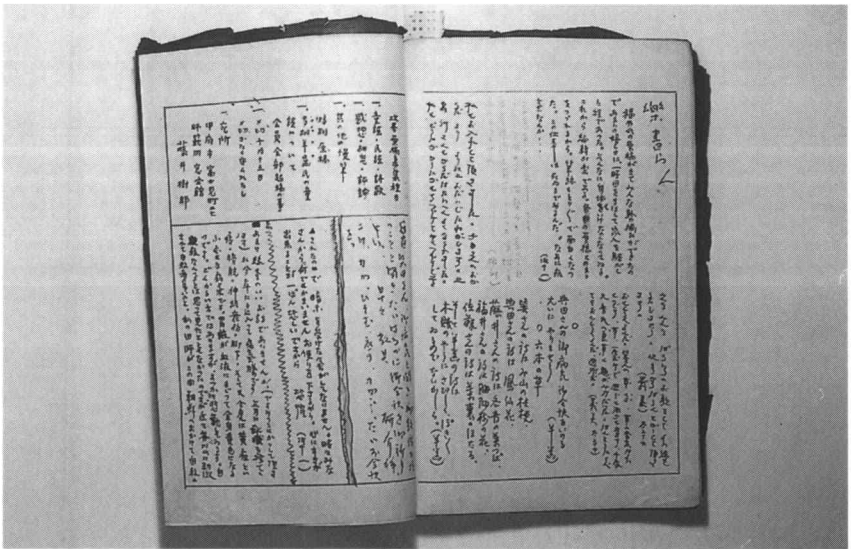
「棕栢」三号 表紙



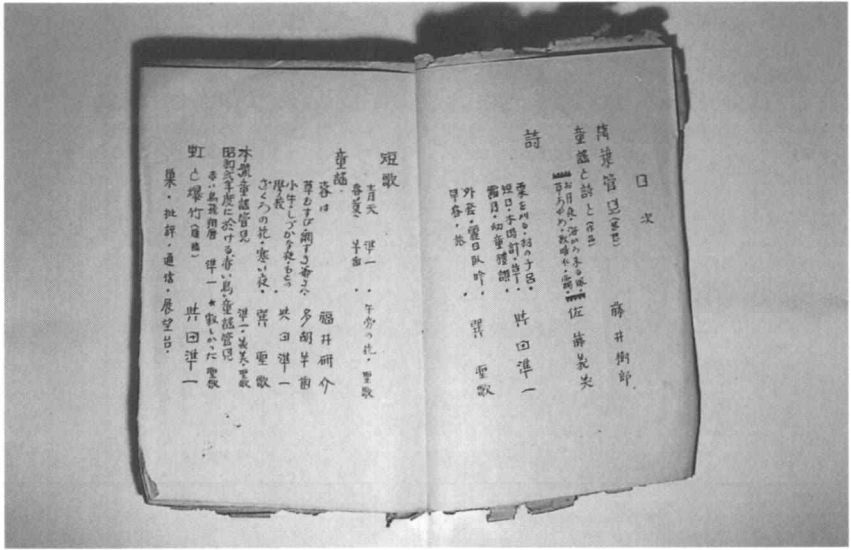
「棕栢」三号 目次



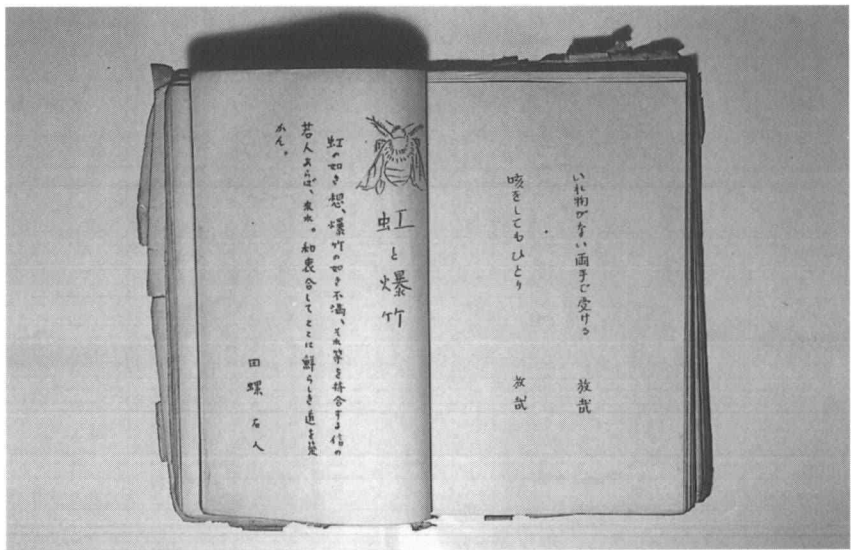
「棕櫚」三号 回覧順記述部分



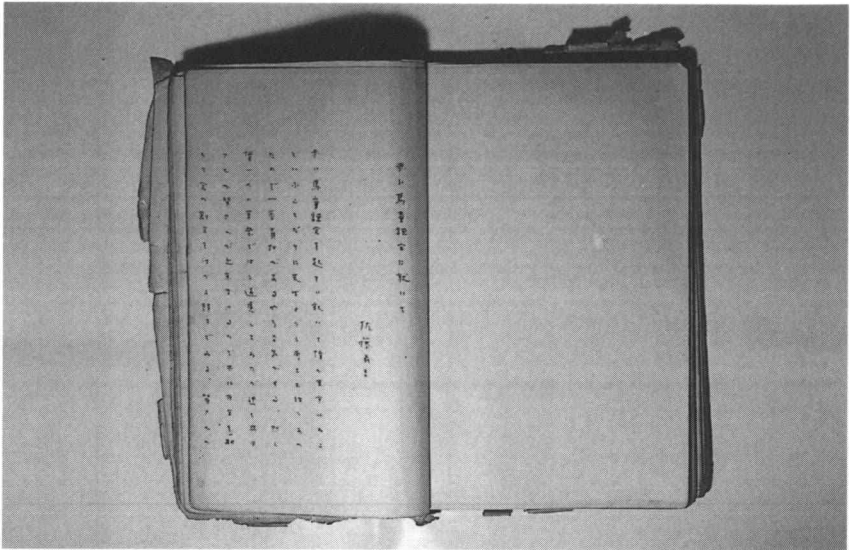
「棕櫚」三号 落書らん



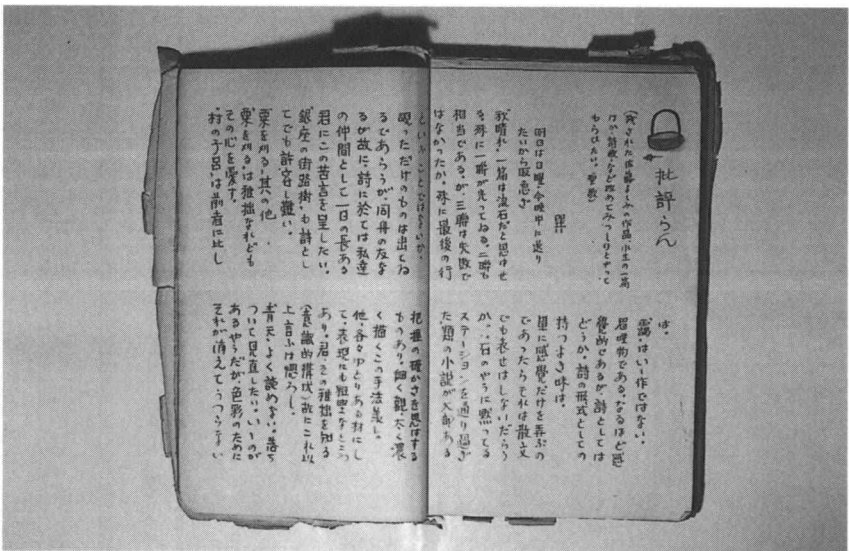
「棕栢」六号 目次



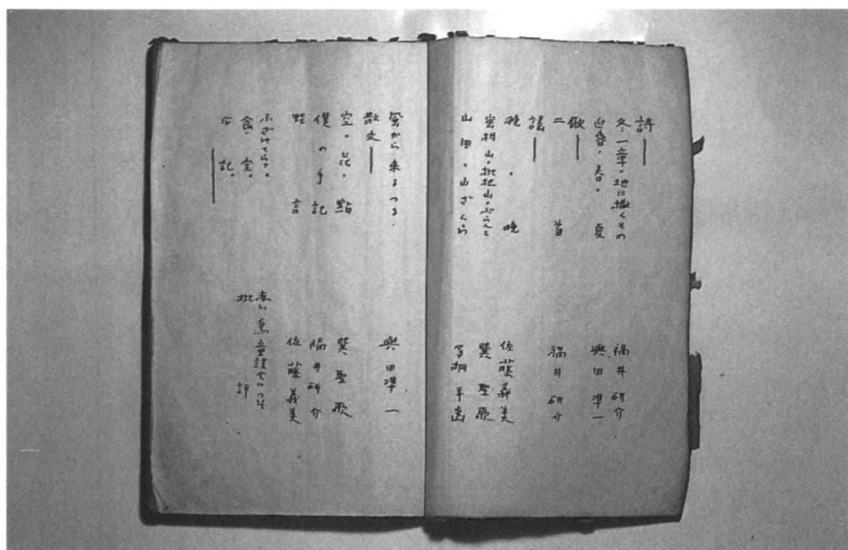
「棕栢」六号 「虹と爆竹」田螺石人〈与田準一〉



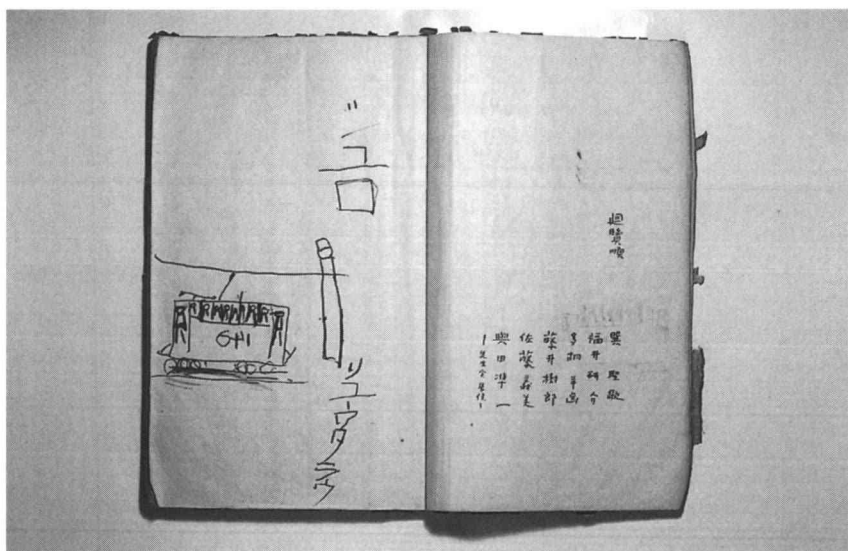
「棕櫚」六号 「赤い鳥童謡会に就いて」 佐藤義美



「棕櫚」六号 批評らん



「棕栢」十号 目次



「棕栢」十号 廻覽順〈絵は北原隆太郎氏〉